

最終報告書レポート

プロジェクト「現代インドネシア民族染織におけるグローバリズムとローカリズムの交錯—技術文化の視点から分析した素材と染め、機と紋様を基礎として」の活動成果報告とインドネシア、タナ・トラジャ県における伝統織物復興について

本プロジェクトは、地域文化再生の機運に湧くインドネシアの現代民族染織に関してその基礎研究を行うとともに、現地における新しい価値の創造に貢献することを目指した。そのために、まず村落では織り手と生活を共にする参与観察を行い、都市部では様々な服飾文化を担う人々と交流を深め、インドネシア民族染織の背景をなす社会状況を把握することに務めた。すなわち、今日の文化状況において、グローバル政治経済・文化の流れのなかに、地域・民族の独自の表現や技術による新しい価値を打ち立てようとする動向を認めることができた。本プロジェクトは、このような現代ローカリズムの復権の動きに、染織技術の観点からアプローチし考察した。すなわち、素材・織機・文様技法の分析を中心とし、さらに、それと関連する生産システム及びその伝習、流通過程の問題にも着目した。これらの研究結果を、今後、ホーム・ページ等の文字媒体を通して発表するとともに、ジャカルタの博物館におけるワークショップ活動を継続し、インドネシア染織における価値の発見と創造に貢献したい。これらの活動は、今後の両国間の研究のためのプラットフォームを築くスプリング・ボードとなるであろう。

1. 活動概要

(1) 織機・素材・文様技法の調査

四つの地域における染織技術の調査結果を表1で示した。織機は、箆をもたない腰機（無箆）と箆をもつ腰機（有箆）の二つに分類した。無箆腰機はトラジャと西チモールにみられ、有箆腰機はバリ、センカンにみられる。次に、織物の文様組織との関連で織機をみると、無箆腰機の分布する地域では、地の経糸の浮きにより文様を表す経浮織、及び平織地に補緯よる縫取技法（以下、緯浮文平織-縫取技法と記す）の二つの文様組織がみられる。有箆腰機では緯浮文平織-縫取技法のみがみられる。しかし、無箆腰機分布地域でも経糸による文様織は廃れる傾向があり、例外的に西チモールでは経浮織（片面経文織や経浮文平織など）が存続し、それらの織物はロティス/ソティスと総称されている。

素材は、従来の木綿はポリエステルに、絹は人絹（ビスコース）に概ね転換した。今日、現地の絹糸の産出量は寡少で、中国からの輸入に頼っている。しかし、センカンでは昨年からは養蚕・製糸の復興に本格的に乗り出したことは注目される。以上の分布から、初期には無箆腰機が使用され、片面経文織や経浮文平織が行われていたが、ついで、緯浮文縫取技法が大陸の染織文化の影響を受けて導入されたと推論する。「箆」はバリ・ロンボク・スラウエシ沿岸部・スマトラ沿岸部にみられ、これは絹の導入をきっかけに、織幅と織目を一定に保つために従来の無箆腰機が改良されたものとみる。一方、インドネシアでATBMと呼称される足踏み手織機は、箆の動きが杼の動きと連動する仕組みをもち、独自の進化を遂げている。尚、ATBMはインドネシア語の *Alat Tenun Bukan Mesin* の略で、「機械を使わない織機」を意味する。

調査地域	使用織機	文様組織（現地名）	素材	特記事項
1. スラウエシ島 トラジャ	無箆腰機	経浮文平織（パブガ・ブガ）、 緯浮文平織-縫取技法（パルキ）	ポリエステル （木綿）	木綿の入手は困難
2. スラウエシ島 センカン	有箆腰機	緯浮文平織-縫取技法	人絹・絹	輸入絹（地元産寡少）
	足踏み手織機 ATBM	無地平織、浮文平織	絹・人絹・化繊他	分業/絹布は輸出
3. バリ島 カラニアッサム	有箆腰機	緯浮文平織-縫取技法（ソケット）	混紡木綿	技法の発達による分業
	足踏み手織機 ATBM	緯緋（エンデク）	混紡木綿	ATBMは緯緋に使用
4. 西チモール TTS・TTU 県諸地域	無箆腰機	片面経文織・経浮文平織（ソティス）、 緯浮文平織-巻取技法（ブナ）、経緋（フツス）	化繊糸・木綿	化繊糸の種類は不明

表1. 4地域における現代の染織技術（機・織組織・素材）の比較

(2) 衣装様式

表2は、4地域における衣装様式を比較したものである。センカン、バリ、チモール（女性用）で従来のサルン様式が引き継がれているのに対して、トラジャでは女性用サルンは、大方、「ロツ」と呼ばれるタイト・スカートに置き換えられている。それに伴って、生産される布は「サルン」から「服地」に適した布へ変化した。だが、トラジャでも男性は公式の場で儀礼服としてサルンを着用する。その他の地域でも、特色ある緋布や織布によって仕立てられたサルンが用いられている。チモールでは、女性はサルンを着用するが、男性は三枚構成の腰布（スリムッ）を着用する。インドネシアの多くの地域で、男女による民族衣装様式の差異（ジェンダー）がみられる。

どの地域においても、地域織物生産の存続を支えているのは、基本的に、儀礼・公式の場における伝統衣装の着用による布の需要である。生産された手織布が、輸出に占める割合の明確なデータはないが、聞き取り調査から、バリの布は国外へ、センカンの布は国内都市部へ、西チモールの布は国内外の市場へ輸出されることが多い。トラジャの布は国内外の都市部に住むトラジャ人へ供給されることが多く、民族染織品（土産品）として輸出されることは殆どない。トラジャで輸出用生産が殆ど見られないのは、儀礼と観光に依存した経済がもたらす産業構造に起因していると考えられる。

調査地域		衣装様式	現地名	織組織/技法	特記
1. スラウェシ島 トラジャ	女性	タイト・スカート	ロツ	縞(パミリン)、緯浮文平織-縫取技法(パルキ)	女性用サルンはかつてドドと呼ばれた。
	男性	腰巻/サルン	サルン		
2. スラウェシ島 センカン	女性	腰巻/サルン	リパツ	格子、緯浮文平織-縫取技法	サルンは腰機あるいは小型ATBM機による
	男性	腰巻/サルン			
3. バリ島 カランアッサム	女性	腰巻/サルン	カメン	緯浮文平織-縫取(ソンケット)	女性用は2枚の布を縫い合わせ、男性用は一枚の布で仕立てられる。
	男性	腰巻/サルン		緯緋(エンデク)	
4. 西チモール TTS・TTU 県諸地域	女性	腰巻/サルン	タイス	片面経文織・経浮文平織(ソティス)、緯浮文平織-巻取技法(プナ)、経緋(フツス)	一枚の腰巻・腰布に、複数の文様織技法が使われることが多い。
	男性	腰布/スリムッ	マウ/ベティ		

表2. 4地域の衣装様式と織組織及び技法の比較

(3) 織物生産システムと経営システムへ

織物生産システムは、織り手の素材、生産用具、最終生産物に対する人的・経済的関係性によって左右される。表1で示したように、このシステムは織機の発達と直接関係し、また後にバリの例でみるように、織組織や技法とも関わっている。表3は、センカンにおいて三つの形態の生産システムが併存することを示したものである。第1の独立システムでは、腰機を使用する織り手が整経から製織工程まで単独で行う。分業は糸の購入、整経において若干見られが、織り手は自己の所有する織機具を用いて製作する。それに対して、バリのソンケット織が分業生産に支えられているのは、高度な文様技法の発達と関連している。ソンケット織は、複雑なデザインから50から100本あるはそれ以上の文様綜絢棒を用いるため、多くの専門職人を必要とし、約6工程に及ぶ分業が行われている。

第2の賃織りシステムは、足踏み手織機(ATBM)により、もっぱら分業に依存する。織り手は最後の「製織」工程に関わるに過ぎない。因みに、あるセンカンの起業家は、織り手の仕事は「織る」のではなく「揺すぶる(ゴヤン・ゴヤン)」ことであると揶揄した。賃織りシステムでは、織機の所有者は複数の分業工程を統括し、織り手は織機を借りて家に置き、「賃織り」(請負)仕事を行う。賃金は出来上がった布の長さによって支払われる。

第3の工場システムは、織り手はATBM工場で雇われて働く。織り手にジェンダーはなく、男女ともに織り手として工場内で働く。賃織りをする織り手が、子供の面倒や家の用事をしながら機織りを行うのに対して、このシステムでは、織り手は労働者として工場内部で終日働く。さらに、2と3では資本の規模に大きな違いがみられる。

生産システム	支払い	織機のタイプ	織機の所有者	織物生産の場所
1. 独立	自己経営	有箆腰機	織り手	織り手の家(村落)
2. 賃織り	出来高払い	足踏み手織機ATBM	起業家	織り手の家(村落)
3. 工場	出来高払い	足踏み手織機ATBM	工場経営者	工場

表3. 南スラウェシ州ワジョ県センカンの織物生産における3つの生産・経営形態

南スラウェシ州トラジャ地域では、機織りは基本的に独立した個人（家族）によって行われ、糸の調達・注文販売・技能伝習（教育）に関しては、共同組合を通じて協力し合う。共同組合は、行政の援助による公的性格と、村落における成員の地縁血縁による関係性にもとづく私的性格の両側面を合わせもつため、運営は公正性を欠く場合が往々にしてみられる。インドネシアで「クロンポ（kelompok）」と呼ばれるこの組合は、この両側面の区別が曖昧なまま運営されることが多く、しばしばそれが紛争の要因となっている。

(4) 政治・政策

● 地域織物の促進と、特産化の法的権利の獲得

- ・西チモール TTS 県は地域織物のパテント化を確立した。現在、商工課による天然染色採用への取り組みが行われている。
- ・北トラジャ県では、伝統織物のパテント化を計るために、2017 年「サッダン織り祭典」が開催された（写真右）。
- ・ワジョ県センカンでは新しい蚕種を導入し、1970 年 11 月から養蚕を本格的に開始した。

● 中央・県の財政政策

- ① 地方自治体への政府援助「ダナ・デサ」は、経済発展のおくれた遠隔地・自治体（デサ）を対象とし、始まって3年目を迎えた。
- ② 子供手当を利用した組合づくりが行われ、織物共同組合が生まれているところもある。
- ③ 県の社会労働課・商工課・観光課の作成したプログラムによる援助（中央の援助は APBN、県の援助は APBD と呼ぶ）



写真 1. 地域織物のパテント化を目指して開催された「サッダン織り祭典」腰機のデモンストレーション風景。
2018 年 9 月北トラジャ県サッダン郡

(5) 流通の調査

トラジャでは、携帯電話などのメディアを通じた注文による製作が一般的である。そのため「売り手-買い手」の関係性は見えにくい。その他、IT を通じて販売する業者、町の商店などが介在する場合もみられるが、対面的友好関係に依存し、契約関係はみられない。トラジャの都市部には、ジャワ・ジパラの工場で織られたトラジャの柄を真似た紺や織布が大量に流入している。これらジャワ産の布は、商店や個人で売られる他、ジパラの業者が車に布を積み、直接路上で販売する光景が見られる。このようなジャワ製の布は安価であるが、布が粗悪で長持ちがしないという評判も聞かれる。消費者は工場製の布と手織布を比べ、目的に合わせて使い分けている。このような外部からの織布の流入に県当局は憂慮し、地域織物のパテント化が叫ばれる要因となっている。

一方、西チモールでは、いぜん多くの村落で、多様な文様技法をもちいて伝統の織物が生産されている。ここでは、トラジャ同様分業システムは見られない。しかし、州都クパンには卸売り店、華僑のアンティークショップ、銀行・政府と連携し工房を構えビジネスを展開する企業など流通の発達は著しい。西チモールの地域織物をグローバル市場へつなぐ選択肢は豊富である。一方、キリスト教への改宗を拒み、アニミズムを奉じるポティ共同体は、自然との共生を謳い、慣習的生活様式、伝統的手工芸を重んじる独自の生き方を追求している。このようなエコロジー思想に共鳴する人々が世界中からここを訪れている。徹底的な伝統主義は、逆に、グローバルなネットワークを通じて西洋のエコロジストの関心を呼んでいる。ポティ・コミュニティの事例は、ローカリズムとグローバリズムを結びつける形態は一様ではないことを指し示めている。

2. 南スラウェシ州タナ・トラジャ県における伝統織物の復興

インドネシア南スラウェシ州タナ・トラジャ県は、地方分権運動の影響から、2008 年、タナ・トラジャ県と北トラジャ県の二つに分離した。それまで、織物の伝統技術は北トラジャ県サッダン郡で受け継がれてきたため、この分離によって、タナ・トラジャ県は織物産業の中心地を失い、大きな打撃を受けた。ただし、西南端シンプアン地域でも織物は盛んに行われてきたが、地域開発の極端な遅れによって未だ「辺境の地」に甘んじている。たまたま、2010 年頃、県庁所在地マカレ近郊ランテタヨ郡に、北トラジャ県サッダン地域から 3 名の「織り手」が婚姻によって移り住んだ。この 3 名が近隣の人々に織物を教え始め、この活動は県の織物産業の振興を企図する行政の注目するところとなった。現在、機織りをする地域は三つの郡（ランテタヨ・サンガッタ・レンボン）に広がり、合わせて 10 余の公認された織物グループが活動する。このように織物が数世代に亘り途絶えた地域に、婚姻をきっかけに伝統技術が伝わり、それがわずかに数年の間に広がり、定着したという事実は特記される出来事である。その社会的背景は、第 1 に地域における手織布への高まる需要、第 2 に県行政による振興政策と共同組合活動、第 3 に地域の社会・経済と生活に適した在来機織り技術が挙げられる。と

ころが、県の産業課はさらに効率的な生産を求め、ATBM と呼ばれる足踏み手織機の導入を押し進めている（表 1 参照）。以下、調査の結果を 4 点についてまとめる。

(1) 手織り布に対する高まるローカルな需要

- ① 経済発展にともなう祝祭・死者儀礼の大規模化、華美化。手織り布で仕立てた衣装の着用がファッションとなっている。
- ② 公務員は週に一度、トラジャ柄の織布で仕立てた衣服を着用することが義務づけられている（写真 5.）。
- ③ トラジャ柄（縦縞、幾何学文）の手織布は地域文化を代表する意匠として、人々に受容されている。
- ④ トラジャの地域・民族衣装が「トラジャ服」（バジュ・トラジャ *baju Toraja*）という名称で、ファッション・アイテムとして流布している。



写真 2. 地域手織布で仕立てた衣装を着る県役所産業課職員
2015 タナ・トラジャ県庁

(2) 政治・政策的背景

中央・地方行政による織物組合活動促進のための財政支援は、これまで、次の三つのケースがあった。

- ① 県の社会労働課 (Dinas Tenaga Kerja)、産商課 (Perindustrian dan Perdagangan)、観光課の三部局の申請による。
 - 中央政府からの援助 (APBN: Anggaran Pendapatan Belanja Nasional)
 - 県からの援助 (APBD: Anggaran Pendapatan Belanja Daerah)。
- ② 中央から遠隔地自治体への財政援助 (ダナ・デサ)。ダナ・デサをつかった織物組合活動への援助。とくにサンガッラ地区ではデサ/レンバン (*) の強力な指導によって、12月、4 組合が結成された。
- ③ 子供手当の一部をもちい、グループ活動を行う。(チモールでは子供手当によって、たくさんのグループが結成されている。タナ・トラジャ県では、シンブアン郡で取り組みが行われているのみである)



写真 3(左) 「人材養成研修会オープニング (織物研修)」、サンガッラ郡でまた一つの織物組合が誕生した。このプログラムは県の補助金 (APBD) によるもの。タナ・トラジャ県労働・移民課主催。

2017. 7. 31 タナ・トラジャ県サンガッラ郡 T 村

写真 4(中) 最初の工程である整経の研修が行われた (同上)。

写真 5(右) この日、貸与された織り道具、腰板、糸 (同上)。

(3) 在来機織りの技術性

在来の腰機が、互酬性の残る農村の家内生産を今日も支えている技術的特性を、次の五つの観点から分析することができる。

- ① 一人の織り手が一枚の布を織る工程を単独で行う。糸と道具によって、空いた時間に作業できる (製作工程)
- ② 木製の腰機は、材料の入手と製作が容易である。特に、無箎の場合、特殊な手工芸技術を必要とせず、一般的な木工技術で製作することが可能である (道具)
- ③ 家の床下、テラス、室内のどこにでも設置し織ることができる。移動も容易である (場所)
- ④ 腰機の床の上に座すという動作は、この土地の身体動作に適う (身体技法)
- ⑤ 注文による、様々な色と文様・種類の衣服に対応して織ることができる (色とデザイン)



写真 6. 講習の後経糸を機に巻いて、家に持ち帰る織物共同組合メンバー
2016 タナ・トラジャ県

(4) 織物共同組合の活動の有効性と問題点

公的財政支援を受けるために、約20名のメンバーによって共同組合（グロンポ）が組織される。三役（代表・書記・会計）がおかれ、糸の使用、受注、技術教育に関して共同の活動を行う。熟練者は見習い者に、織る前の糸の準備（整経）をして補助する。その他、冠婚葬祭における祝い・見舞い金、レクレーションなど互助的機能ももつ。メンバーの中には、組合の仕事以外に、個人で注文を受けて織物製作をする者も多い。このような女性の家内労働による現金収入の多くは、食材の購入、子供の教育費に使われ、一部の家庭では、子供の将来のための定期預金に回される。

「噂話で無駄に時間費やすより、機織りをして有効に時間をつかう方がはるかにいい」というのは、村落でよく囁かれることである。しかし、県行政による援助が始まり約3年が経過した現在、様々な問題が噴出している。



写真7. 新しいメンバーに初めての織りを手ほどきする指導者
2016 タナ・トラジャ県

【問題点】

- ①継続的に織物製作活動をする成員は、どの組合においても、約半数程度である。結果的に、援助により支給された機具は使用されず、放置されたままとなっている場合もあると言われる。当初から、名前だけのメンバーもいる。
- ②多額の費用の拠出によって、織糸が組合に分け与えられてきたが、組合三役による運営が明確でないことが多い。会合で定期的に、詳細な会計報告をするルール（監査制度）がない。
- ③三役への不満から、脱会にまで発展した組合もある。



写真8. 習いはじめたばかりの講習会
同上

3. 受入機関及びその他の機関との協力

(1) 受入機関インドネシア科学院（LIPI）との共同活動

LIPI 所属の共同研究者 Dr. Herry Yogaswara 氏と、織りグループ活動が盛んな北サンガツラ郡を訪問した。レンバン事務所でレンバン長と会見した後、伝統家屋の側の穀倉で機織りをする村民のグループ活動を視察した。

写真9(左) 伝統家屋の前で、家族の歴史を語る
レンバン長

2017.6 タナ・トラジャ県北サンガツラ郡



写真10(右) 穀倉が並ぶ村の機織り風景
(同上)



(2) 商工課・郡との共同によるループ操作組紐研修

タナ・トラジャ県レンボン郡K地域では、村落における手工芸振興の一環として、織物とセプ（蒟醬入れ袋）の製作を行っている。ループ操作組紐はトラジャ語で「マンカッピツ」と呼ばれ、たいへん古い組紐技術である。この紐は袋の口と肩紐に使われるが、多くの地域でこの組紐作りは廃れている。この日、この組紐を研究してきた報告者が講師となり、組紐の実習を行った。協同組合袋もの作りのメンバーは女性レンバン長と一緒に熱心に取り組んだ。



写真11. 足と手の指をつかって行うループ組紐 2017.7. タナ・トラジャ県レンボン郡

(3) 腰機の実地調査

桐生市在住、染織研究者・新井正直氏（元群馬県立繊維工業試験所主任研究員）新井求美氏（桐生織塾塾長）ご夫妻と腰機及びインドネシア織物の共同研究を実施した。北トラジャ県サッダン郡「織りの村」において二日間、腰機の整経と製織の研修を行った。綜統をとりながら行うサッダン式整経、身体全体をつかって綜統開口と中筒開口を交互に行う機織りを体験した。



写真 12(左) 熟練の織り手が見守るなか、整経を行う新井氏



写真 13(右) 製織、綜統棒を持ち上げる瞬間

この研修を通じて、サッダン村の織り手との機織りを通じた友好関係を築くことができた。

(4) ジャカル染織博物館におけるカード織りワークショップ

カード織りは、インドネシアでは西スラウェシ州ママサ県で現在も存続している。伝統的カード織りの存続は世界でも希少な例である。かつてジャワ島でもカード織り行われていたことが、インドネシア国立博物館所蔵のカード織り織機から伺える。染織博物館スタッフと、ジャカルタ在住のテキスタイル愛好家が参集し、報告者を講師として、博物館の企画によるカード織りワークショップが開催された。「エジプチアン・ダイアゴナル」と呼ばれる斜め縞文様を課題とし、カードの前方・後方回転と垂直軸捻りという二つのカードの操作方法を学習した。



写真 14(左) 自分の発見した方法を説明する参加者。



写真 15(中) ダイアゴナル・ラインの文様。

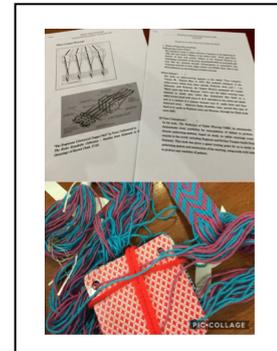


写真 16(右) 当日作成したレジメと、トランプで作ったカード。カードは一人 12 枚使用。2017 年 12 月 12 日 Museum Tekstil Jakarta

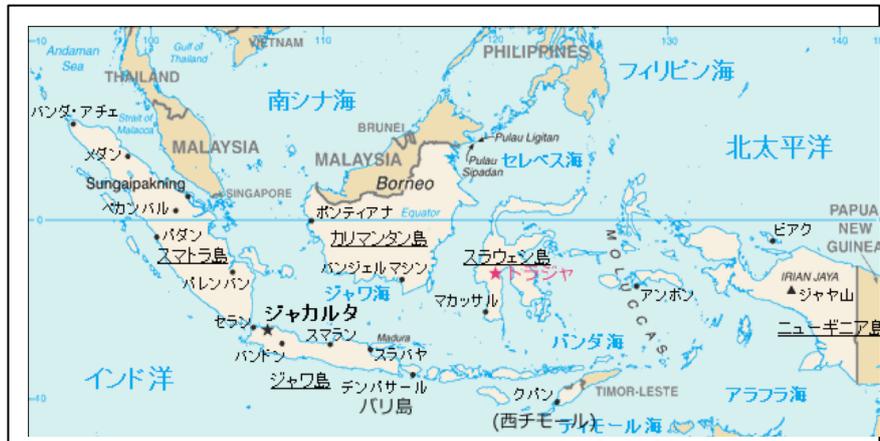
* 「ジャワのカード織り」について

インドネシア国立博物館とアムステルダム熱帯博物館には、同じタイプの「ジャワのカード織り織機」が保存されている。経糸の中央にカードをおき、二人の織り手によって、左右へ、同時に二つのカード織紐を織る技法である。文様は両面昼夜文様を描く「ダブル・フェイス組織」による。

4. フェローシップ活動記録

(1) 調査地は 6 地域である。

- ①スラウェシ島タナ・トラジャ県ランテタヨ郡 (調査拠点)
- ②スラウェシ島北トラジャ県サッダン郡
- ③スラウェシ島ワジョ県センカン
- ④西チモール、TTS 県・TTU 県
- ⑤バリ島カラアッサム県
- ⑥首都ジャカルタ



地図 1. インドネシア全図 ①-⑥の滞在地及び訪問地 ★が調査のキー・ステーション、タナ・トラジャ県

(2) 移動交通手段 →飛行期 →バスあるいはチャーター車

- 6月 ジャカルタ→マカッサール（スラウエシ）→トラジャ
7月 トラジャ滞在
8月 トラジャ→マカッサール→ジャカルタ→マカッサール→パレパレ（スラウエシ）→トラジャ→パレパレ→
トラジャ→センカン→トラジャ
9月 トラジャ滞在
10月 トラジャ→パロポ→スラバヤ→バリ→クパン（西チモール）
11月 クパン→スラバヤ→マカッサール→パロポ→トラジャ滞在
12月 トラジャ→マカッサール→ジャカルタ→日本へ帰国

(3) 活動日程

日程	主な活動内容
6/22-25	首都ジャカルタに到着、受入機関(インドネシア科学院 LIPI)との現地共同調査の打ち合わせ、国際交流基金を訪問し、現地スラウエシ島へ出発の諸準備(通信機器の購入等)を行った。
6/26-7/31	タナ・トラジャ県の中心マカレにて、身元引受人であるE氏の所有するアパートの一室を借りる契約を行う。そこを今後の活動拠点とした。祝祭・儀礼シーズンが始まる時期、E氏の親族の祝祭。死者儀礼に参加し、地域の人々と交流し近隣の状況を把握した。7月下旬4日間、受け入れ機関LIPIの共同研究者が視察に訪れた。北トラジャ・タナトラジャ県の織りの村訪問、死者儀礼に参加し調査を行った。
8/1-8/13	・9月初旬、昨年度より取得していたKITASの延長手続きのため、ジャカルタへ移動した。 ・外国人研究者調査審査機関RISTEKで、今後一年間の調査についてプレゼンテーションを行った。 ・21日、審査の結果KITASの延長が認められた。
8/14-8/22	・パレパレ地方入国管理事務所書類を提出、KITAS発行のための書類を受け取った。 ・トラジャへ一旦戻り、住民票、身元引受人保証書の作成を行った。 ・再度パレパレの地方入国管理事務所へチャーター車で行き、翌日22日新しいKITASを受理した。
8/23-8/29	群馬県桐生市の染織研究者新井夫妻とトラジャ及びセンカンにおいて、インドネシアと日本の織物技術・産業の比較研究を行った。桐生は古くから関東における絹織物の中心地であり、また前衛的な作品を発表しアジア染織につねに大きな関心をよせてきた故・新井淳一氏の制作拠点でもある。インドネシア染織の現況について、高い見識による評価を受けた。
8/30-9/20	・8/31タナ・トラジャ県マカレで県主催の織物生産振興のためのフェスティバルが開かれた。村落から多くの織り手が参集し、機織りデモンストレーションが行われた。さらにトラジャの手織布によるファッション・ショーが開かれ、内外にタナ・トラジャ県の地域織物の復興をアピールした。 ・9/15北トラジャ県が主催する「サッダン織りフェスティバル」に参加。ここでは伝統技能が絶えることなく伝承されてきたため、地域に八百人近い織り手を有している。 ・その後、A地区で、神話的織物と言われている布に関して、神話及び機織り・技法の調査を行った。
9/21-10/18	タナ・トラジャ県T地区において、報告者自身が機織り実習を行った。ついで、村落における質問表をもちいた一斉インタビュー調査を行った。
10/19-11/8	・バリ島カランアッサム県でソンケット織りの調査を行った。 ・西チモール・クパン都市部で織物の流通をめぐる調査、TTS県(モロ・ポティ・ニキニキ)、TTU県(インサナ・ビボキ)で織物製作と慣習・文化にかんする調査を行った。
11/9-11/30	西チモールからトラジャへ戻る。タナ・トラジャ県で織り実習とインタビュー一斉調査を再開した。
12/1-12/12	・帰国のためジャカルタへ戻る。受け入れ機関LIPIを訪問し、これまでの活動の経過を報告した。国際交流基金ジャカルタ支局を訪問し、活動の結果について報告を行った。 ・テキスタイル・ミュージアムの企画によるカード織ワークショップ開催、講師を務めた。
12/12-13	帰国・羽田着

5. 主要協力機関住所

©LIPI/Lambaga Ilmu Pengtahuan Indonesia/ Indonesian Institute of Science

Jl. Jend Gatot Subroto 10 Jakarta Selatan 12710-Indonesia Tel: 5221687, 5225711 Fax: 5221687

Email: humas@mail.lipi.go.id

6. 終わりに

ここでは、今回の調査報告における「2. タナ・トラジャ県における伝統織物の復興」に関して、特に注目する点を上げ、考察をおこないたい。第一に、村落の成人女性の腰機への熟達の早さについてである。多くの村で、数ヶ月前に機織りを習い始めたばかりの女性が、すでに商品として布を製作する織り手となっている。報告では、この問題に関して技術文化的視点、すなわち身体及び織機の物理的特質、それと関連する村落の生活と環境から考察した。一言で、腰機による在来技術は、鋳を刀杼に持ち替える如く、稲刈りや田植えて鍛えた女性の腕に適しているといえる。

第二に注目するのは、織物共同組合「クロンボ」の活動についてである。クロンボが地域織物生産の復興に寄与してきたことは明らかであるが、様々な問題を孕んでいる。それは、その組織が公的に組織されているけれど、他方、村落における成員間の家族的及び地縁の結びつきを基盤としているという内的矛盾に起因する。組合の機織り研修は、外部から呼ばれた教師は別として、組合内の教師に対して「講師料」が支払われることはまずない。ところが、腰機による織物生産は単独で遂行することができるため、織り手として一人前になったとき、彼女は、それまでの互酬的関係性を逃れ、「経済人」として独自にビジネスを始めることが可能である。勿論、それには彼女の「織り手」としての技量と経営者としての資質がもめられる。都市の影響を受けた近郊農村において、人々は機織りをめぐって、互酬的な関係性と市場経済的な関係性の間を揺れ動いている。

最後に、極めて現代的なソーシャル・メディアの問題について述べる。スマホやフェイス・ブックが村落に浸透し、これらのメディアが機織りをめぐる人々のネットワークを媒介していることは無視できない現実である。一つには「生産者一顧客」を結ぶメディアとして、二つには文様や技法などの知識・情報を伝達するメディアとしての役割である。今日、大都市に居住する多くのトラジャ人は、現地の手織布を求め、インターネットを通じて織り手と直接交渉を行うようになった。一方、FB等を通して恒常的に情報を発信する織工房が出現している。さらに、それらのサイトに流行のデザインを求めてアクセスし、新しい情報を得ようとする織り手も増加している。これまで、伝統技法は共同体・家族のなかで子々孫々受け継がれ、秘匿されるべきものと考えられてきたが、今日、「伝統」はメディアを通じて飛び交い、あらゆる人に対して公開されるようになった。これが、手織布生産の再生と今後の発展に如何につながってゆくのか注目される。以上、トラジャの伝統織物の復興について、若干の考察を行い、問題点を提示した。

今後の展望として、この調査結果を生かし、インドネシアの地域染織に関してより広い視座から分析をすすめ、これからの活動の可能性を探り、具体的な形でそれ実践してゆきたい。2017年のジャカルタの染織博物館におけるカード織りワークショップ活動を発展させ、一プロジェクトとして「途絶えたジャワのカード織り」の実験的デモンストレーションを将来的に展望している。これは、現地では失われた染織技法に関する研究成果の、現地への還元として意義をもっている。染織の領域において、小さな歩幅であるが、一步一步研究・活動を進めてゆきたいと考えている。(以上)

謝辞

6ヶ月間のフェローシップ活動を大過なく終了することができ、今、安堵の気持と、不十分とはいえ、成就の感慨でいっぱいである。同時に、現地の方々の数々の支援が、昨日のここのように思い出される。本プロジェクト活動は、地図1.で示したように四つの島—ジャワ、スラウェシ、バリ、西ティモール—に跨がっている。その間、多くの時間を南スラウェシ州タナ・トラジャ県で過ごした。ここでは、住民・村民の好意に支えられて有意義な活動を進めることができた。多くのトラジャ人協力者と友人に心より感謝を表したい。その他の訪問地でも、多くの地元の方々の支援を受け調査をすすめることができた。バリ島では、短期間であったにも拘らず、順調に調査を行うことができたのは、在留邦人の方々の臨機応変なサポートの御陰である。西ティモールでは、政府プロジェクトの下で働く方々（プندانピン・デサ）が、村落の織物グループを訪問する手はずを整え同行して下さった。行く先々における、チモールの慣習に基づく大きな歓待にも感激した。また、西チモールの滞在先ソエでは、クパン在住のバリ・ヒンズー・グループの方々と遭遇し、帰路のクパンでは笑顔で迎えて下さった。この出迎えによって、如何に旅の疲れが癒され、心が和んだことか！総じて、初対面であるにも拘らず、現地の人々が私の地域染織への関心と調査を理解し、その意義を認め、協力を厭わなかった。それが、今回の調査結果につながったと確信する。さらに、インドネシアにおける現代ローカリズムは、それを支える情熱的な人たちの活動によって、地域を跨いで人々のネットワークを創出していることを強く印象づけられた。最後に、このプロジェクトの企画を終始支えて下さった国際交流基金アジアフェローのスタッフの方々に、深い感謝の気持ちを表明し、この報告の最後を締めくくりたい。